

現地に立たなかければ何も分からない

小池純一

二〇一二年一〇月五日、私は労働組合が主催する平和研修に行った。場所は長野県の松代。一九四四年一〇月、沖縄が本土決戦に向けた時間稼ぎとして捨て石にされ、初空襲が始まったのと同時期、大本営の移転と国体護持のために敗戦の日まで工事が続けられた場所であった。

私は今まで、沖縄・横須賀・南京（中国）・哈爾濱（中国）をはじめ多くの戦跡を訪れ、この地で何が行われたのかを自らの目で見聞きして学ぶことを通じて、平和の尊さを実感してきた。松代はそのようなところと比べると、多くの人が「知っている」「聞いたことがある」とは言えない地域であり、「このような地域にある戦跡ってどういうのだろう」という漠然とした疑問を持ちながら長野駅から団体バスに乗り込んだ。

現地を訪れた日は「松代藩・真田十萬石まつり」が開催されていて、松代藩真田家十代の二五〇余年におよぶ善政をたえる秋祭りとして、松代城を中心ににぎやかに開催されていた。そんな町の雰囲気バスの車窓からぼんやりと眺めな

がら、最初の目的地である象山地下壕へ向かった。

象山地下壕は当時の日本政府が東京の大本営及び政府機関を移転させるため、山に掘られた地下壕で計画の七五%まで工事を進めたところで八月一五日を迎え工事中止となった。全長約六kmにも及び、段差も無く碁盤の目のように計算され綺麗に作られた地下壕は、横須賀の貝山地下壕や沖縄のガマ（自然壕）とは比べものにならないほど立派だった。政府中枢が入るといふことからして、高い完成度が求められたことが分かる。

現在は長野市が戦跡として一般に公開していて、私たちに他にも幾つかの個人・団体がひっきりなしに出入りしていた。また、地元高校生がボランティアで平和資料館を開設し訪れた人に真実を伝えようと真剣に取り組んでいる姿が他の戦跡がある地域ではあまり見られない斬新な印象だった。

私たちは象山地下壕を後にして、かつて大本営と天皇の住まいとして建設途中であった舞鶴山地下壕へ向かった。

先ほどの象山地下壕よりもさらに山奥で、自動車も滅多に

こない場所にコンクリートの半地下状の頑丈な建物が五棟、ほぼ一列に連なって建っていた。現在は、「氣象庁・精密地震観測室」と民間の教育施設に使用しており一部の建物は内部も公開されている。

建物を一目で感じるのが、その構造の頑丈さである。当時としては非常に珍しく、分厚いコンクリートに覆われた施設で、戦後六〇年以上過ぎた現代においても、現役で使用できるほどの建物だった。また、建物奥には天皇が入る予定だった部屋も公開されており、これも当時、物資不足の中にもかかわらず秋田杉が使われ、透かし彫りの欄間など贅沢の過ぎりだった。

今回、二カ所の地下壕を踏査して感じたのは、当時の日本は本土決戦に備え、この地に首都機能を移転させようと、「本気」で考えたこと。その結果、先祖代々土地を守ってきた人は、「お国のため」とされ土地を接収されてしまったこと。地下壕を作るために多くの労働力が動員されたこと。そこには大陸からの強制連行で従事させられた人が大勢いたことが分かった。視野を広く周りを見渡せば、日本古来の田舎風景が広がり緑豊かな山々に囲まれた静かな場所であったが、そこでの生活基盤を「戦争」という行為で破壊してしまった。

同時に沖繩では、本土決戦に向けた単なる時間稼ぎに民間

人も多く巻き込まれ、さらに犠牲者が増えてしまった事実を忘れてはならない。生きたくても生きることができなかった方に、二度と同じ事をしないために生きることが誓った。

二〇一二年二月一六日、衆議院選挙が行われ政権が再び自民党に戻った。アメリカ追隨の政治は野田政権時代もハッキリと現れたが、今選挙で自民党は「国防軍」という表現を使って、「日米地位協定」や「周辺事態法」の再整備、さらには憲法改憲の採決を過半数にまで下げて、その先にある憲法九条を変えやすくするためと見られる動きが活発になっている。

よくマスコミの前に出てきて、「南京大虐殺はでっち上げだ」「犠牲者数があんなにいないわけがない」と述べる人がいる。このような人たちは、インタビュの前や演説で述べているだけで現地に行こうとしない。真実は行って見聞きしてその場所に立たなければ何も分からない。

もしかすると、本当は真実を知っていて、自らにとつて都合が悪くなるから「あえて」行こうとしないのではないかと強く感じてきた。だとすると、私は未来の子どもたちのために、声を大にして前に向かって訴え続けて、「嘘つきには負けるものか」と拳を強く握りしめながら帰りのバスに乗車したのだ。